



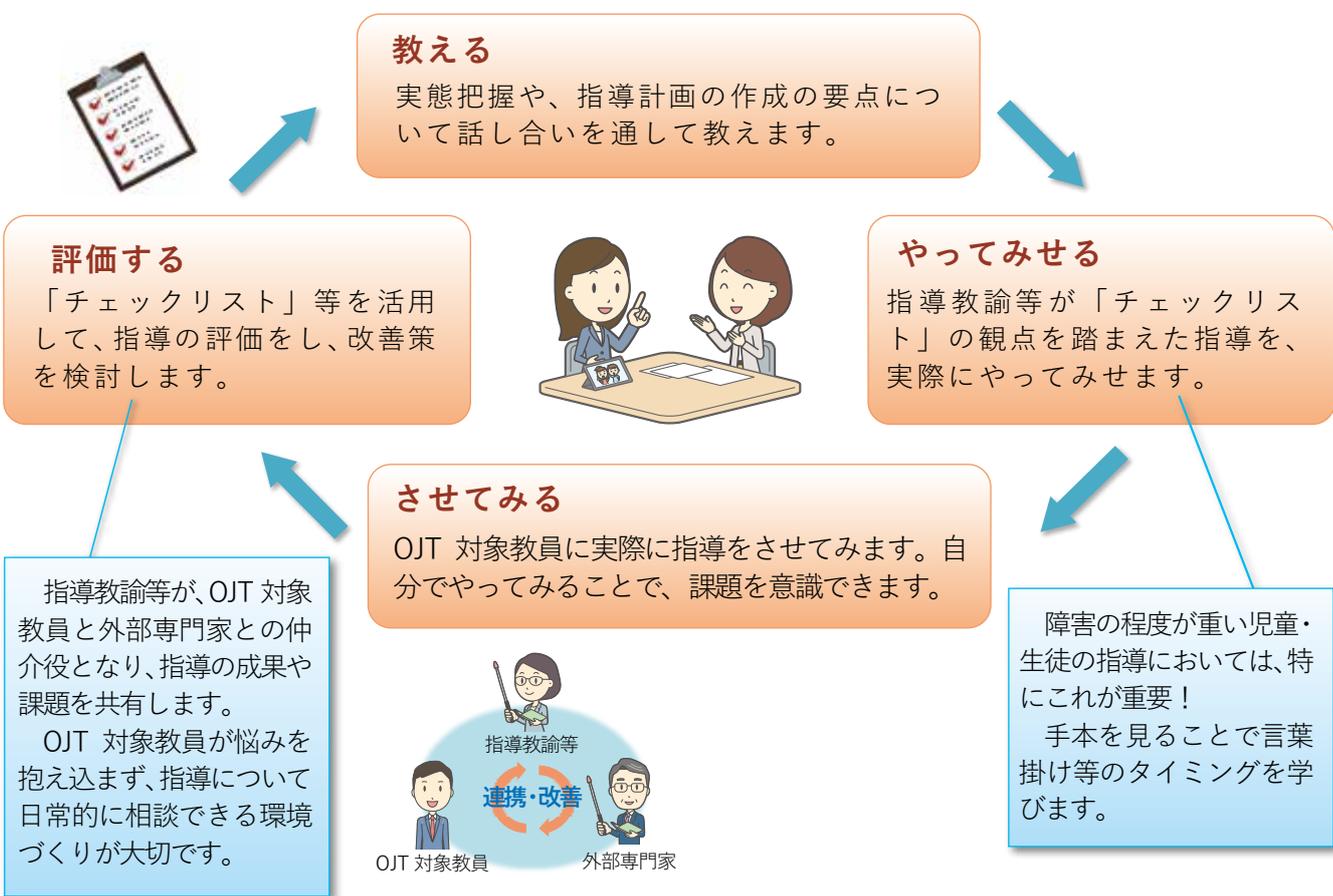
## 全ての教員が確実に指導技術を向上させるために

ここまで、障害の程度が重い児童・生徒の言語能力の向上を図るためには、教員が基本的な指導技術を身に付けるとともに、段階的・系統的な指導内容に基づいてスモールステップを踏みながら指導をする重要性について述べてきました。

しかし、教員一人の努力でそのような指導技術を身に付け、適切に指導を行うことは容易ではありません。そのため、指導教諭等や中堅教員等を活用した OJT 体制を構築するなど、校内で組織的に、教員の専門性や指導力の向上を図る取組を推進させることが重要です。また、各校で取組が進んでいる外部専門家の活用においても、例えば、指導教諭等が外部専門家と指導対象教員とを繋ぐコーディネーターの役割を担うなど、校内 OJT 推進の要として力を発揮することも期待されます。

本事業の事例研究では、障害の程度が重い児童・生徒に対する指導の経験が浅い教員（以下、「OJT 対象教員」という。）と指導教諭等がペアとなり、「段階表」や「チェックリスト」の活用を通じた OJT に取り組みました。その結果、全ての OJT 対象教員が、自身の指導技術を向上させ、児童・生徒の言語能力を向上させることができました。

各校においても、OJT 体制を整備し、全ての教員の指導力の向上を図る取組を組織的・計画的に推進していきましょう。



# OJTの推進に向けて①

## 自分自身の指導観が大きく変化しました！



OJT対象教員

当初はチェックリストの項目をほとんど意識できていませんでしたが、今は細かなところまで意識できるようになりました。OJTを通して、自分自身の指導観が大きく変化したと思います。

児童の発信を見逃さずに指導が行えるようになった頃から、「分かった！」という思いを児童と共有できるようになり、児童から称賛を求めたり、児童の笑顔が増えてきたりしたことが喜びでした。

(知的障害教育特別支援学校 教諭)

児童の目の動きをよく見て、視線が向いた瞬間を逃さずに教材を呈示できるようになりました。個別指導に関するOJTをきっかけに、対象児童の集団学習での様子や、日々のコミュニケーションのことなど、指導全般について、OJT対象教員と一緒に考えるようになり、これからは、一緒に考えていきましょう。



指導教諭等

## 日々の積み重ねで、生徒も私も変わりました！



OJT対象教員

指導方法の手順や教材作成等、具体的な指導技術が身に付いたと思います。短時間でも1対1で個別指導を積み重ねると、生徒が変わっていくことを実感しました。今は、毎日、個別指導の時間を確保して行っています。

(肢体不自由特別支援学校 主任教諭)



外部専門家の指導のもと、同じ課題の指導をする教員がペアを組み、実技研修を行いました。

アドバイスした視点をしっかり意識して、個別指導を積み重ねることができています。生徒の見る力、考える力が着実に伸びています。



外部専門家

指導場面の映像を一緒に見て、生徒の視線がチラッと動く瞬間を確認できました。指導を振り返ることが教員の成長に結び付いています。



指導教諭等



## OJT の充実

## 指導教諭等を要とした校内

大切なのは… 有効な視空間を意識し、生徒の視線の動きを見逃さないこと

### 個別指導の概要

【対象生徒】 肢体不自由特別支援学校 高等部 2 年生

【個別指導】 週 1～2 回 各 15～20 分程度

【指導目標】

- ものを注視・追視する力を高める。
- 隠れた物がそこにあることを推測する力を養う。

【指導内容】

- 段階表 1-2 「追視」「注視」
- 段階表 1-3 「記録・記憶の保持・想起・推測」

【教 材】 光る棒を筒に出し入れする



### 指導上の課題をチェック！

- 教材を生徒の見やすい高さよりも上方に提示するため、生徒は上を見ようとして全身の筋緊張を誘発しやすくなっている。
- 生徒の視線の動きを見逃していることがある。

大切なのは… テンポよく学習を進め、間違えさせないこと

### 個別指導の概要

【対象生徒】 肢体不自由特別支援学校 中学部 2 年生

【個別指導】 週 2 回 各 20～25 分程度

【指導目標】

- 自分の名前（3 文字）の文字の順番が分かり、正しく構成できる。

【指導内容】

- 段階表 2-3 「単語構成（3 文字）」

【教 材】

自分の名前の 3 文字の単語構成

顔写真



### 指導上の課題をチェック！

- 動きが機敏で気分が変わりやすい生徒に対して、学習のテンポが遅いため、生徒の集中が途切れている。
- 正選択肢、誤選択肢どちらにも生徒の手が伸びてしまい、何が正解か分からない。

## コラム

## 効果的にOJTを進める上で大切

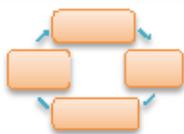
障害の程度が重い児童・生徒への指導経験が浅い教員に対する OJT では、学習に必要な環境づくりや、言語能力の向上の基盤となる「見る力」や「考える力」を養うために必要な指導技術を高めることが重要です。

その場合、例えば、OJT 対象教員が、指導内容の「段階表」から「何を指導するか」が分かったとしても、その内容を「どのような環境で」、「どうやって指導するか」をすぐに理解することは困難です。指導教諭等との OJT では、指導の見本を見て実際にやってみたり、指導上の課題について話し合ったりするなど、実践的な取組を通して、指導の意図やポイントを理解し、着実に指導技術を高めることが期待されます。

OJT の方法は様々ありますが、障害の程度が重い児童・生徒の場合、視線の動きなどの反応が一瞬であったりするため、指導場面を録画し、ビデオによる授業分析を行う方法が有効です。繰り返し映像を見て、姿勢介助の有効性や、教材の呈示位置による児童・生徒の反応の違いなどを検証します。

## OJTの推進に向けて②

How to  
OJT



- 「チェックリスト」とビデオによる授業分析(月1・2回)
- 授業観察(月1回)
- 外部専門家による指導(年2回)

### 指導技術のココが向上!

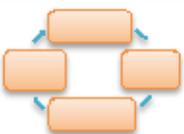
- ✓ 生徒の見やすい高さに合わせて、教材を提示する高さや速度を調整できるようになった。
- ✓ 教材に視線が向いていないときに、数秒動きを止めて、視線を待つなど、生徒の視線を把握できるようになった。



### 生徒のココが成長!

- ◎ 苦手だった左側にも視線が向くようになった。
- ◎ 筒に棒が隠れると、出てくることを期待して教員を見るなど、見えないものがそこにあると推測する力が芽生えてきた。
- ◎ 卒業後を見据えて、作業的な課題に取り組む基礎的な力を高めた。

How to  
OJT



- 授業者支援会議の実施(ビデオによる授業分析、協議)
- 外部専門家による指導(年9回)

### 指導技術のココが向上!

- ✓ 集中が途切れそうなときは、別の教材に切り替えるなど、生徒の気持ちやテンポに合わせて学習を進められるようになった。
- ✓ 正選択肢を見たら誤選択肢をすぐに撤去するなど、間違えさせない手順が身に付いた。



### 生徒のココが成長!

- ◎ 学習がテンポよく進むことにより、集中できる時間が増えた。
- ◎ 成功体験の積み重ねにより、利き手と反対側に正選択を呈示する課題も、よく見比べて正答できた。

## なこと～指導教諭等の視点から～

ビデオによる授業分析を通して、どういう場面でどういう視線の動きがあったかを知っておくと、児童・生徒の視線の動きを予測できるようになるため、実際の指導場面でも、視線を把握しやすくなります。一度、実際の指導場面で把握できるようになると、他の指導場面でも自信をもって把握することができるようになります。また、それまで「この教材は興味がないから見ない」と思っていた課題について、指導教諭等が実際にその場で指導をして見せ、同じ課題でも環境設定や支援方法の工夫次第で生徒がしっかり見られることが分かると、OJT対象教員も見通しをもち、主体的に指導方法等を工夫しようとしています。

OJTを進める上では、丁寧な指導の振り返りや見本の呈示等を通して、OJT対象教員が見通しをもち、主体的に改善に臨めるような取組を充実させていきましょう。





## 実技研修を通して指導技術の向上へ

教員一人一人の指導技術を着実に向上させるためには、OJTの推進とともに、校内研修の充実を図ることが重要です。

障害の程度が重い児童・生徒の言語指導をテーマに校内研修を行う場合、例えば、認知発達を中心とした講義型研修や、ビデオによる授業分析を行う事例検討会のような研修を通して、指導に必要な知識を習得したり、児童・生徒の特性を理解したりすることが期待されます。



しかし、前述のとおり、障害の程度が重い児童・生徒の指導の場合、教員の高い専門性や指導力が求められることから、指導に必要な知識の習得や理解を促進する研修に加えて、実際の指導場面を想定したロールプレイなどの実技型研修を通して、指導技術を高めることができる研修を計画的に実施することも重要です。

実技研修では、指導教諭等や外部専門家による実演や直接指導・助言を受ける場面などを設け、繰り返し練習することにより、教員一人一人が、「チェックリスト」に示されているような、指導の手順や、言葉掛けのタイミング、教材の呈示方法などの基本的な指導技術を理解し、着実に身に付けられるようにします。このような研修を、学校として組織的に継続して取り組むことにより、教員がそれぞれの指導技術を高め合い、共通理解を図りながら指導ができることにつながります。

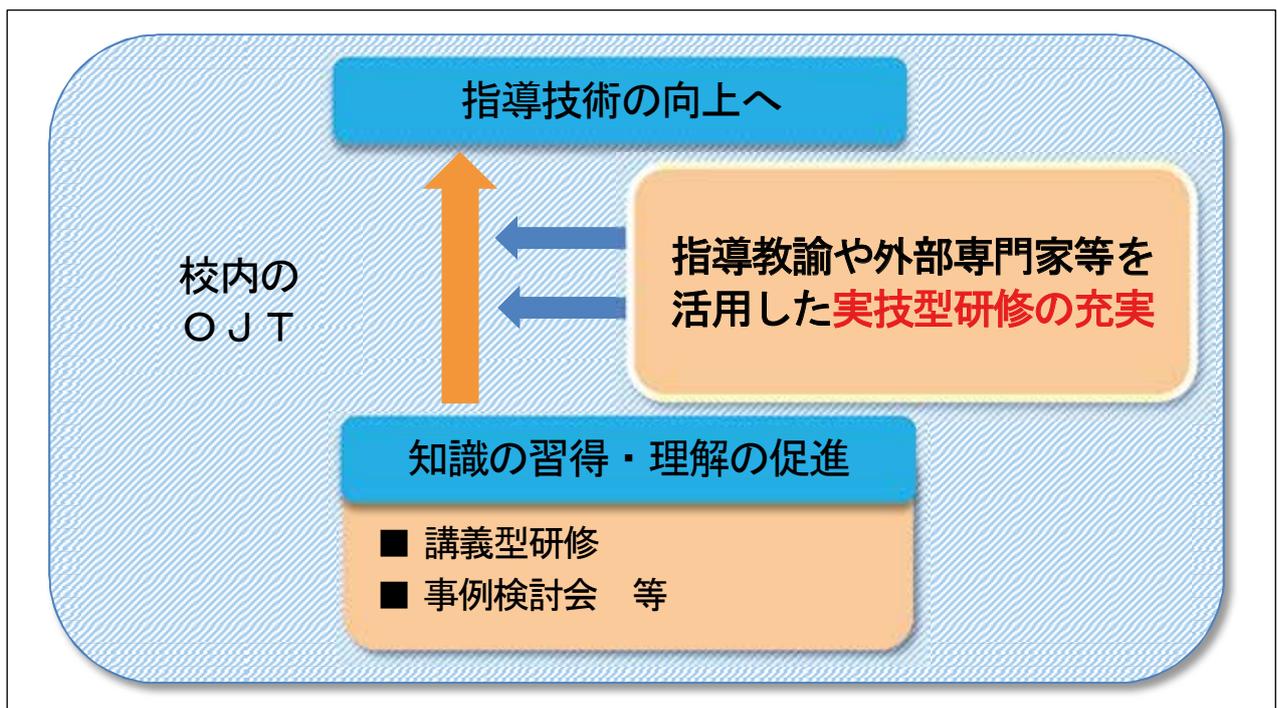


図2 実技研修を中心とした校内研修モデル

### 研修事例① 外部専門家の活用による実技型研修

#### 【研修の概要】

- 個別指導に関する指導・助言を依頼している外部専門家を講師として招聘する。
- 回によって、「形の弁別」や「単語構成」等、取り組む課題を決めて、実際の指導の手順やポイントを学ぶ。
- 教員同士で、ペアになり、児童・生徒役と教員役を演じることを通して、実技のノウハウを学ぶ。



#### 【参加した教員より】

- ✓ 児童・生徒側の視点に立ち、教材の見え方や呈示されるタイミング、言葉掛けの内容等について、適切かどうか考えることができるようになった。
- ✓ 正選択肢を見た時に、「見ているね」と即時評価されると正解したことに自信がもてること分かった。できたことをすぐに評価することの重要性が分かった。
- ✓ 今後は、学校介護職員とも指導の手順や方法について共有し、指導を充実させていきたい。

### 研修事例② 外部専門家による授業のビデオ分析を用いた演習型研修

#### 【研修の概要】

- 「上肢機能の発達」をテーマに、グループでビデオによる授業分析を行う。
- 外部専門家による児童・生徒の行動に対する評価・解説及び講義を行う。

事例検討①：「物をつまむ」を課題とする生徒

物をつまむためには、親指の付け根の筋肉が発達している必要がある。手を付いて体を支える動きなども効果的。

事例検討②：「平仮名の書字指導」

姿勢が徐々に左側に傾いている。左手で身体を支えるよう介助し、常に身体の正面に書く位置があるよう意識する。

#### 【参加した教員より】

- ✓ 手指の操作性の課題であっても、全身の動きや筋力と関連付けて考える必要があることが分かった。
- ✓ その場で介助方法を確認するなど、実際の指導場面に役立つ知識が得られた。
- ✓ 今後は、目の動きに関する分析も行ってみたい。